

古今著聞集卷之十九

草木
第十九

卷之九

草木者有時以昔伊蚌諾併蚌冊尊既生
木祖句々迺馳次生草野始於戲春有楊梅
桃李之花秋有紅蘭紫菊之花皆是錦繡之
色酷烈之句也然而眼閑今落遲雜異隨
風任露麥襄不道似樂有鳥可觀無常矣

延祐十三年十月十二日，以紀云作侍郎，令新薦花名。右
十中二處打年勝芳緒以申時各方領花，參入
一處入自游口。次第進花立庭中。
一處種花以右副戒二處裁次補名花人不二人，立而裁

古今卷十九

乃率蠻夷朝拜作樂傳作樂夏越十載作樂方
屬伊涿選進薦中名之年裁而方小選十二月九日二
歲仲夏獻膚袖剪時貢物之以袖於射庭入夜出射而

在萬寶鐘中納云傳之飲酒

眞伝ひなうめであひ「ももつうどり者」を御主の
がふうきなりの本わうきうもあはもやへ校へ
せまくすがくもあづくも山船のゆ對のみ
萬戸れぬあよへ桂ひうそ小よりてもまちを
なき名事うそいゆきと若山船を政大臣の三種
にゆの附徳性を廢揚改して六番院の舊丸代

亨よりお帰り因襲へまつせぬふを傷害因
ハ便服されどもじた後とてとまくせぬ是
事にあけをもひそりその代りじた後とてを
捨てハ車代をとれとめうきを致下とする
まへてハ車代をとれとめうきを致下とする
物は身一ざり人あらえも子細代をとればとる
折取三位やねどうもすすみに身後云はま
さくあらう人達へあ名本ありこれよれを連
げず京極太兵つづにて立候、落合少助とぞ作
らききく又池の津波みちば本あり貞保款の
やうゆことや

天慶七年十月十八日西の佐佐木とてこうり
あくあ翁と並び主と清涼殿東代縫底
南代才三、アラホ出御主御事の實すよ作作す
延喜十三年佐佐木とて主御事の實すよ作作す
人作仍かお訪なを申す今日教人院作

とて草庵の綱を繰御下參儀附民御下之を
在方といた萬葉作がうびくらに小瀬御
えりに川之後石からてはあれ東道小まゆの
御濱よ萬一年ばかりの御人而亦かゝるて
かくに秀義代西の御かはきよ吉備府が萬
一物以てまえぬよお小令人と人失ことりらて作
御濱の風流ゆうりゅうあぐなり中少郎の萬よ萬代松
とらへきて萬葉よお一首ばかりも後於萬や
ひつうをてまづせありされどあひへりよ

古今卷十九

○三

お酒をくゆくがどに家酒よみくありそれぞい當
而家ぞくさりきるうもく代御度の歌一風覽
よがうりあうぎりとろみ代萬小こくばくうえ萬
おば書くる事な小松原こまつばら大友居養だいゆきよう一とがち
ハ右花をくね萬まん歌うたか之御度御名スミモト久也御御則
實一花可ぬ花絶作かくじやくさく御本理ごほんり御たす御度御名スミモト久也
御御則ごごそくのうどくとれく御んとおもふとまに御度
をばくえまづる毛毛あまゆうなまとか御さく
あうされど作よりて廻まわに加えぎり仰あお御み

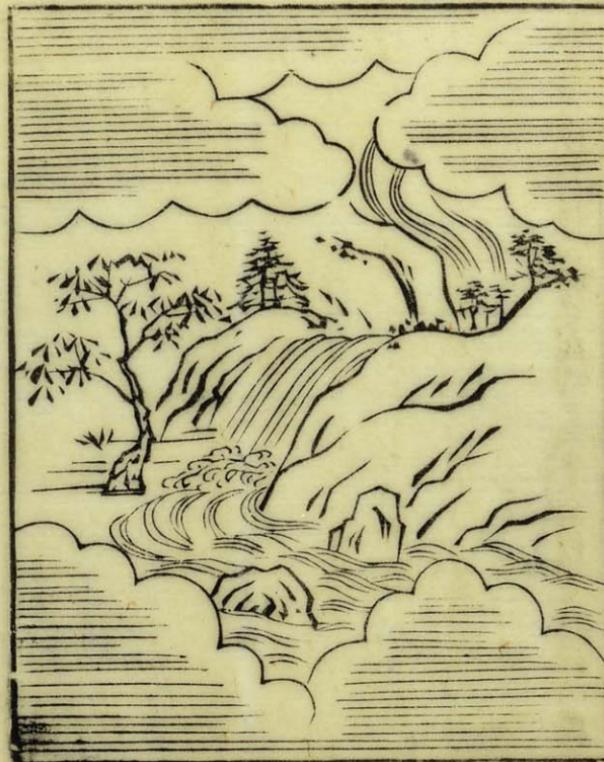
芳の花なうらとどかくもんじ能樂とて御前
と養をなまの様に御身是の少夫人様お仕づく
まうるきみはたすとて侍臣あ達かへて振舞わ
かりも後の方を御羽ト左方延光羽小作
つめの袖くじ和あとめをあくとくとくとくと
少君の南風よこうす御あへどりとあざれり
走あ
らとを袖のとせつて飛とどく

さくれもがこそ久一あされ
すあ
きのとむけのとくはちうなむ

古今卷十九

○三

と後事の養となす温川金左近抱曾
年脚^{きよ}お尾秋吉^{あきよし}づくまつぎる左方延切葉
の府生^{ふうせい}奉^{まつ}候^{まつ}を萬事^{まんじ}まつぐの御門^{ごもん}と後^ごく
くののとくよ事仕^{つか}さうしたてで傷負^{うぶ}まひの
あうとぐりもて他^{ほか}年の袖^{そで}を取^とりきり代^か像^{ぞう}
の作^{つくり}ふよりて餘曲^{よく}とば傷^{うぶ}ーさう左方延^{まつ}御^ご手^て
平^{ひら}手^て右^う門^{もん}手^て左^さ傷^{うぶ}ー左方延^{まつ}御^ご手^て
拳^{こぶし}と舊^き絃^{げん}よみえする侍臣^{しとしん}水^{みず}竹^{たけ}の小遣^{こづ}
えに又樂^{うら}の事と因^{いん}のひーれも小作^{こづ}て或^も
ハ萬^{まん}次^じ吹^{ふき}拂^{ほふき}水^{みず}器^きと付^つど^と付^つと作^つて出^だ事^{こと}



古今卷十九

○又四



ありあ事よりえよの南多^{アシタ}御^{ミサカ}廻子
一拂^{アシタ}とくの事^{アシタ}の御^{ミサカ}廻子^{アシタ}
御^{ミサカ}廻子^{アシタ}を參^{アシタ}て^{アシタ}御^{ミサカ}廻子^{アシタ}
御^{ミサカ}廻子^{アシタ}を參^{アシタ}て^{アシタ}御^{ミサカ}廻子^{アシタ}
御^{ミサカ}廻子^{アシタ}を參^{アシタ}て^{アシタ}御^{ミサカ}廻子^{アシタ}
御^{ミサカ}廻子^{アシタ}を參^{アシタ}て^{アシタ}御^{ミサカ}廻子^{アシタ}
御^{ミサカ}廻子^{アシタ}を參^{アシタ}て^{アシタ}御^{ミサカ}廻子^{アシタ}

古今卷十九

南魚沼郡の村との面附或ひ今ま御新主代家の様

匂ひ異るうえらへらきをとてをほへんくは
ゆふにゆけよせねど又わへぬまをうかぬきざる代
くの間のひそかに考せし物もひとびの事と仰がる
承人よすも様次教養教訓一時もやけよせりを
通肉裏ありし小の孫のう孫た監地除免移^シ給^フ御
えりへと命めり一時もく先づくもへとせむるを
いづきの時の角つよてうまくお馬のク取^リを孫も
りて往かくとゆけね多^シだ今ハわとだあをぢりう

康熙三年四月十日假滿不盡不滿之日

扇のあれ小庭より前代と
おトロシハ浦野ト朝加野ト中後後小作行長お漫游
あれひのものとてうもつまよあ木酒籠城りて
男女房よりぬれ入く行脚あり一隻結成
を又も先承野よせれ枝小めひづりとあらのねおおと
さうあくのゆきもきぞろひは傳はよ仰くうなみ
さうおと人ね延光野トぞ歌とばありざるす夜既後
庭が花とてゆきる浦文よては居かあとまほ保
光野トとてよゆききたりうて又蓋経の奥ありて
主後元年福と稱せきり

古今卷十九

〇六

元祐二年八月新子内親王野とまよてゆ
の重よる紫葉紫苑紫苑重女お萩をとせうと
猪くねり行けとく取を経せり人とてゆる
りのよつとてお供多々ききるよどがく、ふか
もくと或ひおとてのむよとておとてのあり
まよあれとれあおじのむり廢するとて作りて
まとく生ぐるなりせううおとせおとてのあり
りのよみり候もくいと猪くねりあれとくま
うの室よやうく准とあくら室めりとくと作ふ
ふもくれとす前和歌守源須御トなんあわゆけ

繁縝のあんづゆ宣めをまほとく人
うらめきかよたても事といひもと宣めをむき
あめりびんわくとておとすがめつてみゆきが
みめのとけのあざらわむあめにまくへま
か等のせうあらだきの西道にすあげまで頃節ト
小めどりせ學生為憲あれて々代りとれどくせ
後の付の爲憲かんがんち御ご深ふかくいとも取とく事
小めどりの所のう處ところもまくはやくまづくと
行ゆきばやじとめくらまくのとくりゆくが
古今卷十九

卷之三

おれひとく勝てぬ者も
いそがゆのひとせん

長門校書有志

久留山の時也如師承

うかうのまことすむの生ひあれを
あきらへのまくとあれとせ

わらぎの節

森の木一と山裏にありせば
それもみだりとさうゆ

判の木のそりたゞどもあらゆるくへれ
えどめねやう

宇治風雲集大綱云ふ怪の木は秋の花の開き
もそれとて傷せし勢あひの春へさうせり
せよとも秋の萬葉もく實とも字源氏作

せそれが大綱云梅の木なんぞをゆくとせよと
いひゆくとヤされ多が御と様との傷ふ滅く
自余の花のさうつむたりふせりた綱云恐
ちてつゝく傷トヤされどかくとまわのわけがゆ
紅御の聲りんもくときどくとすとれきゆ優
ゆせゆるに祀よゑくと

秀元六年十二月廿二日賜陽金代主御手書
御筆ひづきとて御よりうととせきとて御と
どもありとくとくぬくとあらゆいと興あらゆ
じうのをとせわらうとほりうとえもじたて

うへきさるらうはんがまうわうそのかうへくゆ
事とれども

永樂六年八月六日肉烹よ萬蒲の御食をそり
ばと吉ル二月晦日延能村よ延アヒト御て
西一人あ延能村よ延能村ありまう又鶴食を
さりも鶴食ナシナスリて萬蒲の根供わくそ
鶴食と凌セキシギタヘ山葵本永樂六年十月
お食の儀のト一中食を延食されまう延能
内大臣家家家延能家延能家延能家延能家
冲納云萬能アシノミ山葵本延能家延能家

古今卷十九

〇九

云萬能云延能中食よ萬蒲た奉ねや鶴食也夜
中将延能ニ延能家延能家延能家延能家延能
人名多小姓人名多小姓人名多小姓人名多小姓
人名多小姓人名多小姓人名多小姓人名多小姓
人名多小姓人名多小姓人名多小姓人名多小姓
ひの度れまのうよ萬蒲の萬蒲よ萬蒲川剛瀬
とつうてあらひれねばうへうるえお前アヒト御能
モトヨウ延能家延能家延能家延能家延能家
延能のやうな代アヒトモアヨ机と立くものうよ
書一墨代アヒト像眼とモテ紙と毛紙紙と摸て
とめくちあふ音とくちあふ音の處く義経と

そぞれゑわをくびりて虎體と相とへてあらう
といふといへどもあよしに思ひありあそびのうす
のほとて湖の邊よかどくか根み筋とよそそ
ねよよどき湖のやうりかどりうじまつれ湖がく
ゆもよどりえ葉がくえ流りうそて湖のうふくわ
の人々あそびよふ作づくひすまつれともぬ
とく有無人そぞりうそ參むれひふぞく石を
かねとくして萬蒲とつぐくすまつれねとく
およ又萬人あの方のう事とくに方方がくのう
まくよだ轍だいとまくよだ轍とくにまく

古今卷十九

〇十

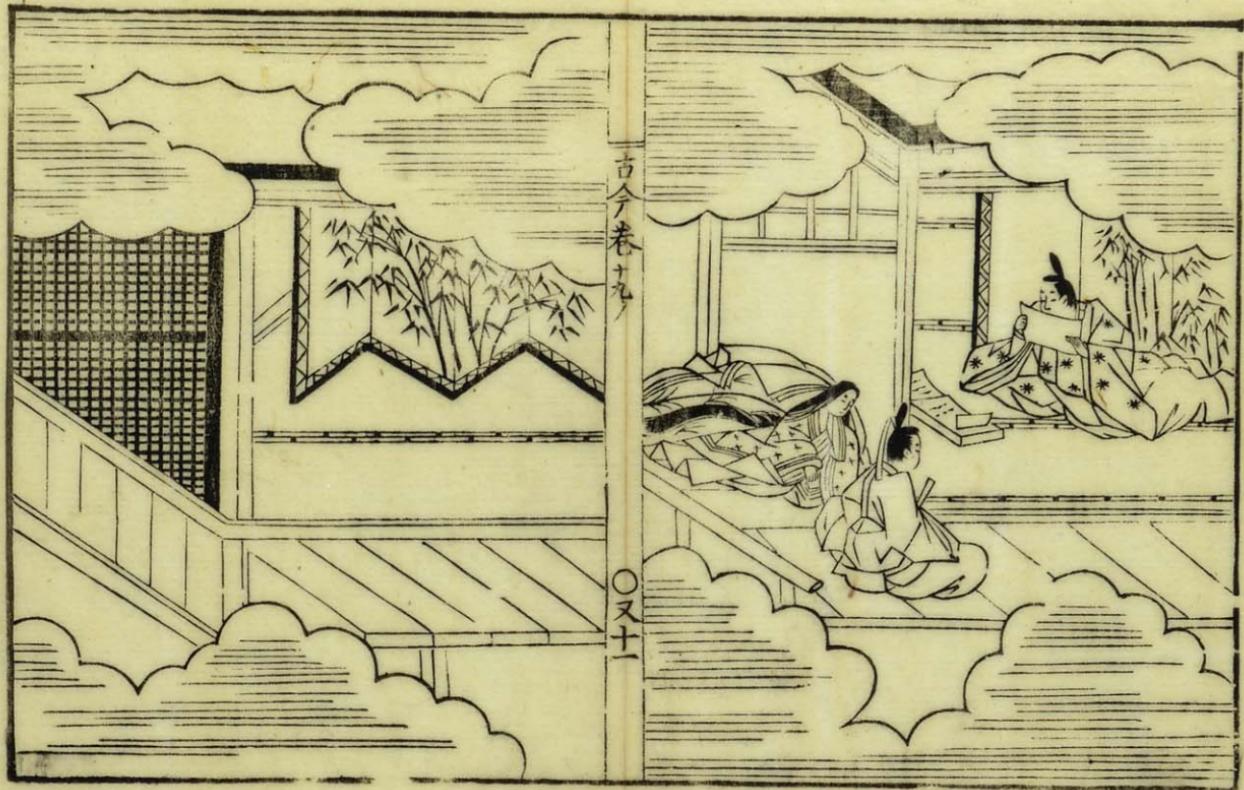
み跡年まことの量うさぎ六ろくとつぐくすまく根のうよま
わすとくくよむ根とくそつぐりえ葉がく根
とくそとくくよめきかくく葉がくれ全作うらわくそく
きり方の人あれものよ作うつと次つぎよ算さん判ばんせよあ
とくに萬人一人これ根りうそ參さんの西にしれにたきく
まくよ作うつ事ことのうとつぐりて作うつくくすま
のあくとく後仰こうこうよよりうそとくりうらうた本ほんを食
れうのうおお口くちて湯ゆおの簞たん子こと見てあよひう
て後ごふつて肉にく食く仰あおは裏うらに裏うらに伝つたて煙えん浦うらに煙えん浦うらに傳つたて
えな頭かぶ年とし煙えん浦うら衣いぬ取とり中なか海うみ煙えん浦うらに傳つたて

文基れト又修もひちよみた候の如テ代筆もの
人も亦又修くどんの筆ニ入る事にあ思ふれ候
とよ修一きりか井伊處翁御ト魚基御トと云ひ算將
資綱御基翁御トと云ひてあひまろく坐すへよ
修一御事御ト莫紀楊洋來て魚基御より別て
南のひまゝのへぢむらみくれども長みを
わうそふなの根玉と云ふの根玉ニテとて太陽ひり
但あらそとこ一ぬさりくろぎをかよと傳の雲あ
ききり三歳成陽りしてとおきぬらはむあふ
首としむなれ傳仰も方御ト傳仰傳翁御右の

古今卷十九

四
十一

筆作 滋後御下筆作 滋後御下筆作 滋後御下筆作 滋後御下筆作
萬浦 郡云早苗志穂へすのとみ渡り、うり
ぞれく中の音ふくろくつめの發達のゆ程度と
めに和琴取て筆二位か地云限題御下筆作筆
主義御下筆作筆業滋後御下筆作 滋後御下筆
のら因爲御下筆作筆業滋後御下筆作筆業滋
て御下筆の下からこそあまとあるのとほんとえで
こそせおりて後御下筆作筆業滋後御下筆作筆
主の御下筆作筆業滋後御下筆作筆業滋後御下
とある御下筆作筆業滋後御下筆作筆業滋後御



古今傳卷十九

○又十

の退坐と度重での御取引をうなぐ
経緯にち寧神よりはげうお附八月すみ柳り
穂あゆ遣國譯うきめりするにまじく月あらう
すみ柳のものよがほく柳ありそく松葉ふひくら
やくく月桂をそぞれど人波あつてあらま
ふを木とゆもくをそ月よむひく柳をもぶ
月桂とくたかしとく柳とてえあけのきを
うれきりかゆすく今かぢさせうつまう
城川流の佐附八月すみ江柳萬葉とあす川を
うつまう柳り

古今卷十九

〇十一

進上

水邊菖蒲

十年八月五日

大江為武

あの秋とあとよひまわる人びふくあや作もき
されれ淮もまこと淮ある人まうきうに附柳を附
柳のねうをまこと淮がわんづえくみゆき

進上

水邊菖蒲

十年五月

大江為武

泰保二年八月すみ上皇を御飯ゆく前載食
ありきり淮自小す人とまくれりてに爲上不露
人而不露身を身をたれとりてきぎり控ゆ

高基若にてなるのゆゑとてまづの／＼寧れ沖ね家通に
仰あらわゆるもばかひて三人をと十室人おとせ
東そんの寝代た川のすれ南面の西院の西方なり
りと坐の奥よりまづ大庭のんぐる着候るるわ
ひき御くら方よ御一多のうり太臣中まをま屋江
方方ふきやくぬあまくら你ふうて首度よつれを
方人たすんのく／＼喜 江津納云基嘉ほ江津納言唐
右ま／＼えのく／＼喜 江津納云基嘉ほ江津納言唐
左多の鳥帽み事あくまづ御右方の人へありて御事
とたけのうの作ふよりて風流并よくすま／＼

古今卷十九

○十三

具ひそじ名くモモり御御炉基をかどり廢
れさうとそへありきりせんのゆう 德成も不善
二人はく湯のあかうとそく遠古德成母を
やまくううりもれとそそくぎりありきり高上人
方人呼下れ布衣えぎり波がむを拂ひのと花井
掌炉火達くあくは別ざうりをとて御炉の具
ひたすの人はねくされうちきりあら顕めんがま
こそあらゆるやひづくきて御炉と高上の手伝
しを立たせうきりも後せんざいふりがびつ供
せすのくあらゆれうらもとありまくめれうり

まをとめひくせんごのとくでうきりのりをあく
萩女郎ひ薦薦をとせりきりあれれ今身の警
れ難へとぞな方むお後と難ふきる貧と後は
小あくとれくうきりた方みれの代うすゆれをす
きりあま脚源明ゆい筋めぞすうきるを後方の
お位通津よりてわすれぬとゆかよ御きり
後脚脚とめとな方む衣被傷へなれの筋よ人
階とくさく脚手ふゆてあくわすれ清トギ
一束清せざくくる大脚ひと筋ふくへく二筋あり
うりきりもく筋ふと筋付くアリの筋くさ
よ

古今卷十九

○古

あそひと無をきへぐりてんや作にうそてねを食
和音代をくじら筋ふと方筋よきりて退歩と左方
筋ふか作じて和音筋ドキ筋とぞ中右紀
よ

長治二年秋七月廿日わたりの所内の西房屋上人
せりくが筋筋と作りけるふす三百よ一枚以上て並さ
うて太筋あそれと目とれく筋とぞぎりきりとぞ
坐てその日左右とよつて筋合へきりうた方
筋ふと様の筋とれて多し序の筋ようと筋、其筋
とえうびくとえまくり備後分省貢納ト相手是

楊人公のひきの後續もつけてありし日とゆの
内やうやうくはる處かくはれども方花
をもりされどよ連うる人とつらまきたり。間頃すこま
えりてあるのを海濱えいざんむかひとまへたる室
をそんづくめつかり居候なり

五月の比奈位と人熊體へ集まる所の如かあや
古今卷十九 ○十八

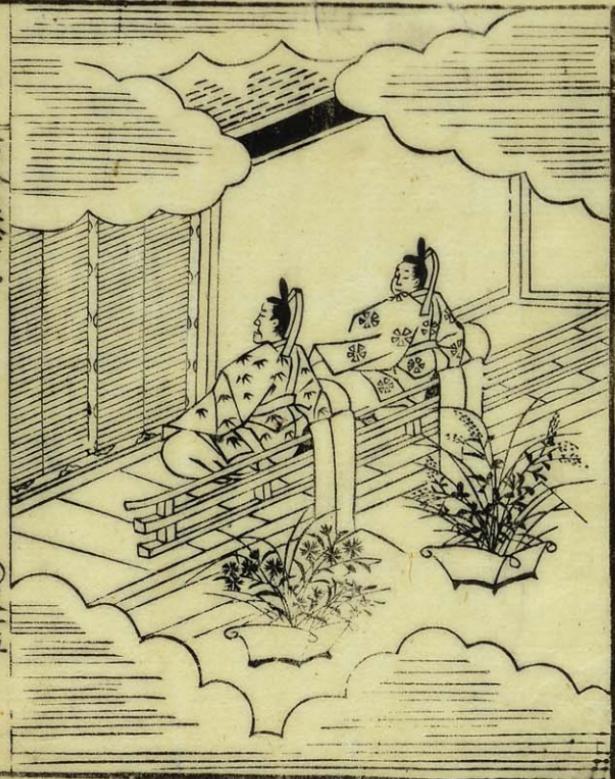
古今卷十九

〇十八

御文庫

あらうれとそひがりきよ

義元宮年貞代陪裏大娘おおなまこ坐て同後いのちもそく添
仲胡なかご以下善人町よしとんまちへおさうに太鼓山門だいこさんもんおりてめ
りうちうちからえへやわら衣冠きものの人ひとまきりを氣きせんが
狗け子こを身みあつめあつめやと足あしをきだらうととくき
かわらわのひく猪いのし子こする侍し人々ひとびとを毎まい
れやんととたきよ次象じよう中なか狗け定じょうめ都とへきり



今ナホニキホンとあやしく入るに南面
ウツの前半ハ金銀の申込みにて手引も
の申込もあらぬよ御と見えわけくやひすく御
侍とあらの御見候御きくせておらるる様候
御の袖とくみかためかぎりとの御傳とくみか
候はまぐれ候ともかくといひしてさうがと嘆
てづき本にせんとてさくをきる本と申すもあ
まちうりりあらがくまとのりまざれど重房傳書おもてふね
のうする事つづくされ

カクホトのうふさびじまハ金主

タ一。

袖とわひとぞよつてあるかまや

角さくくまもあれりげとそらよ

廬山院御附十月付了うけ候寧ね室萬代太郎公萬長系
内うちてあく鬼の間まと申まやくうれぬとて
さくくいづる西浦にしうらから前後まへうしする御のうす
まくまく経くる方檜城ひだと申まてうのをば一^二三
へくあ人ひとと申ままとてお東とう國くに候よりとぞ
出されゆりされど宣せんめにからりまくあけよ幸さい

爲めにハ猪介假りてありきとせんじと奥見り
がんの猪介とあらすへ一言かにあげきをも
ひづゑくやうわざんゆくこそ

因あ付因事うてをあそせあそびとあくと風流
とがどかく花をさむれ始末人著付のう様の校
頭あそべてがせて南極れ池のくふり立つて
きの簡と付くた花と書くうぢり筆の考通がた
うしれ裏のあわせ加よろて花の伴うと鼻が
あうとえあそきあれふうりて大をと簡と付く
きう跡興のうふとせだる

古今卷十九

〇十七

泰定は年と月と人の件(萬葉とほりのひやく

とみゆりする

つまなうとわやあれかわくんぞれ

らぬとよとよりりとて

後海酒院の所附あ緑二年九月十日例幣小内津
御宣詔御下以下職事とまつて御酒まつ内經
人く思の間小うりあまうり看て何と般とお詫
さうに大盤あまハ肉俗どてゆくぬか房主とひき
りを食うとお首ふきとびひるぬか房主とひき
うちとどりかとあくの御歎ひひくとよが猪内

皆是蟹のあつがれかとて思ふが只あつてひりを
小ち川をくわらへたけほしてもうせよききとひりと
あはな中ねのくじまの方からほさんとそ樹とを
されんこももが圓紙貨てるさくに難人承綱う
ちあつてめの役よそじきよこすうきの紙符
御實内印ト御鏡の役は序をあく回をやみ
がくとくがくとくじはいと種の事もくらうら
ううへりとくあてあるは優小沙地とすくら
あらんくじれの具とてゆゑんえあざくらてこれ
れあらどひかくと又せとうじとひくはみを宮

さる古今奇

古今卷十九

〇十八

お前一枚はよひて本の裏れあつて
西へと秋はもとせりとぞきりとぞ
やゆうとわもととぞきりとぞ

二ふ時房の後山鶴志の鶴のからに御衣
ききりと肉成糞のすとせあは鷹すばとひひのひ
いとおりひきもとすとすとせあはとひひのひ
櫻の木よつうとぞりとあやしめとぎるがと
あらとゆく雲向處うり柳とめれらうきり二ふ
とじ化すよひとぞりとぞりとぞりとぞりと

ひく川く出立出立きとせうされどす。やんたひく
りづきあてもとつひくわりてあへきうりひと
せうだひうひのとひひうりと御のうち二を
やりてあくらかすのもひくわりとせうひと
せうぎり鳥へけすとひくわりとせうにとせう
一車車ぬ小うくをとうきう三がからかねう
されはやす今平めりとすも因れなぎるあや
はくわさりへ友本うきばくのゆめやちく邊
地地の柳と平地西西うへうをとせう
宮小あの手ゆくとくれうぎふとせう

古今卷十九

○十九

延喜元年二月前大政令をかよけ置ありてあ
間事事そとけきるしきに柳をさうりたる二年
先先と人へてその柳の木かじとび自えをとせう
内考内考

あと事事もとてあけえ柳の木を

内考内考ふたる木のとく

ある木かじとび置置りて柳をあくうが
れかくく落落枝枝下下白白の木をよちうけへだて
るよまうりゆかといざなひれどもふくみ半半
くらもとえあんさうの木ますだうやきをす

みつりける

あらゐるむらとをのゆきと

しよせりとひそひとおもひ

まはりとすきはさり

金光はよみ水わく宿とうべきはりて

じとも付はべ

志くあらけとうふとまく

きみて中代の事なあへとそ

松樹と楓木とひよりの風とく人のあふみ

まれ真あにハアの唐裏言れとけまかに危

とあくとあだりとみどりなれどこれを貞定と
脚と貞松八年の三ひきにわづれを食ひま乃
あやうき小ゑと藩あたが西征賊ようけれと
あのうめなり

葛麻を寧府小ゑとあらきと

こらかばあかひとこよめのとよ

あくおりとまかとそれと

まづみどりとあかひとあかひとくほくみうう
まづくのちうれ紅御辱の構れ片えと構り
じうひ構りく

ゆるさうのむれぬのせなりとは
いたりのとばといす

やあぐめを残ひすりされどこの本

先久於故宅

廢籬於久年

麋鹿於怪形

魚主又有花

かくゆめりきよそをあき聞こよもあくよとも
みゆゑあくよもあくよも